

日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析

著者	小西 円
雑誌名	国立国語研究所論集
号	15
ページ	91-105
発行年	2018-07
URL	http://doi.org/10.15084/00001598

日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析

小西 円

東京学芸大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本研究は、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」を用いて、学習者のフィラーの使用を分析したものである。研究課題は (1) 学習者の習熟度による違い、(2) タスク形態による違い、(3) 母語話者との違い、の3点である。分析の結果、研究課題 (1) に関しては、初級レベルでは母音型のフィラーがほとんどを占めるが、習熟度が上がるにつれて母音型が減り、語彙型のフィラーが増えることがわかった。研究課題 (2) (3) に関しては、母語話者のフィラーの使用を分析した結果、対話タスクと独話タスクとでフィラーを使い分けているのに対し、初級レベル・中級レベルの学習者にはそのような傾向が見られなかった。それらのレベルでは、使用できる感動詞が限られており、タスクに応じて使い分けるにまで至っていない。上級になると、タスクによる違いが現れ始めるが、正確な運用には至っていない*。

キーワード：フィラー、習熟度、タスクの形態、日本語学習者、I-JAS

1. はじめに

フィラーは、言いよどみ、場つなぎ語、間投表現などさまざまな呼び方をされるが、談話を構成する重要な要素として、従来から日本語教育における学習の必要性が指摘されている。

フィラーは、品詞の上では感動詞に位置づけられる (日本語記述文法研究会編 2010: 119)。感動詞は「事態に対する感情や相手の発言に対する受け答え等を、一語で非分析的に表す形式」(益岡・田窪 1992: 60) とされ、うめき声や咳などの生理的発声と、「りんご」「雨」のような言語記号との中間に位置づけられる (田窪 1995, 田窪 2005 など)。感動詞にはフィラーの他にもさまざまな語が含まれる。「ハイ」「ウン」のような応答詞、「ワー」「エッ」のような驚きを表す語、「モシモシ」のような呼びかけ、「オハヨウ」のようなあいさつなどである (日本語記述文法研究会編 2010: 119–120)。

定延 (2005) は、母語話者の子供が感動詞を間違えにくいことから、感動詞が名詞や動詞などとは大きく違った存在であり、行動の一部であると述べている。しかし、日本語教育の観点から見ると、日本語の感動詞の1つであるフィラーも学習者にとっては外国語であり、他の品詞と違ってフィラーだけが自由に使いこなせるわけではない。学習者が自分の母語のフィラーを使ってしまうという事例もある (野田 2015 など)。

* 本稿は国立国語研究所機関拠点型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」(プロジェクトリーダー: 石黒圭) の研究成果である。また、本稿は第3回学習者コーパスワークショップ (2017年12月3日、国語研) における発表を基に修正・加筆したものである。

データの抽出には、国立国語研究所コーパス開発センターの浅原正幸准教授にご支援をいただきました。ここに記して感謝します。

そこで、本研究では、日本語学習者コーパス「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(以下、I-JAS と呼ぶ)を用いて、学習者のフィラーの使用を、習熟度とタスクの観点から分析する。

2. 先行研究

フィラーの先行研究として、日本語のフィラーを分析するものと、学習者のフィラーを分析するものの2つを概観する。

前者は、談話のタイプごとに多様なフィラーを分析した山根(2002)、応答詞・感動詞を談話的機能の観点から分析した田窪・金水(1997)、感動詞を話し手の心的操作に関わるものとみなし、「エエト」と「アノ(一)」の研究を行った定延・田窪(1995)、談話管理理論の観点から「アノ(一)」 「ソノ(一)」を分析した堤(2008)などがある。また、フィラーを含む感動詞は音調と切り離せないが、日本語のアクセント・イントネーションの枠組みで日本語の感動詞全般に対応できる音調記述を試みた須藤(2008)は、資料として「感動詞の音調と代表的な意味・機能」の一覧を付している。浅田(2017)も感動詞の音調がわかるような配慮がなされている。

後者として、西山他(2007)、高村(2012)、宮永(2009)などがある。西山他(2007)は、34名の学習者のフィラーを縦断的に調査し、会話の流暢さとの関わりを分析している。学習開始8か月、10か月、1年7か月の時点でデータを収集し、流暢さとの関連を分析したところ、フィラーの種類、出現間隔、出現場所によって、フィラーが流暢さの評価を下げる場合も上げる場合もあると述べている。高村(2012)は、発話におけるポーズとフィラーが流暢さにどのように影響するかを分析している。フィラーの頻度が多すぎると聞きやすさの評価が下がること、聞きやすさの評価が高い発話は発話節の頭にフィラーが出現することなどを指摘している。宮永(2009)は、日本語母語話者と学習者のフィラー「アノ」を比較し、日本語母語話者の「アノ」が4つの文脈に分類して説明できるのに対して、学習者の場合、学習歴が長い場合は母語話者と同じ傾向を示すが、学習歴が短い場合は使用した「アノ」の約半数しか4つの文脈に分類できないことを示している。

宮永(2009)でも指摘されているように、学習者の習熟度とフィラーの使用には関連があると考えられる。山内(2009)はフィラーに限った研究ではないが、OPIのレベル別に学習者の発話を分析し、「アノ」「マア」「ナンカ」「ソノ」「コウ」などの語が超級話者に出現が多いと指摘している。また、Iwasaki(2011)は日本留学を経験した学習者の留学前後のフィラー使用を分析している。留学後、フィラーの量は減るものの種類は増えており、また教科書に提示された例を超えた社会的・対人的目的での使用が増えることを指摘している。

このように、学習者の日本語の習熟度とフィラー使用の関係については、さらに深い考察が必要であると考えられる。

3. 研究課題

2節でも述べたように、習熟度とフィラー使用の関係は、大規模なデータを使用してさらに深く分析する必要がある。また、フィラーがタスクや場面によって使い分けられているかという点

についても分析が必要であろう。小西 (2017) は、日本語母語話者が対話・独話などのタスクの形態ごとに機能語を使い分けしているのに対して、中級学習者にはそのような傾向が見られないことを指摘している。つまり、タスク形態の違いに応じてフィラーがどのように使い分けられているのかを、習熟度別に把握する必要があるだろう。

そこで、以下の3点を本研究における研究課題とする。

- (1) 学習者のフィラーの使用は、習熟度によってどのように異なるか
- (2) 学習者のフィラーの使用は、タスク形態の違いによってどのように異なるか
- (3) 学習者と母語話者におけるフィラーの使用の違いはどのようなものか

4. 調査の方法

4.1 調査データの概要

まず、調査の対象となるデータと学習者の習熟度について述べる。調査には、日本語学習者コーパス I-JAS の第一次データと第二次データを使用する。これらには、学習者 370 名と、比較としての日本語母語話者 50 名の調査協力者のデータが含まれており、学習者は 12 の異なる言語の母語話者からなっている。すべての学習者が SPOT と J-CAT¹ を受験しており、成績が公開されている。第一次データで公開された学習者 180 名は個人間の熟達度に有意差がないことが示されており (迫田 2016: 198)、おおむね中級レベルであると想定される。そのため、本研究では、第一次データの 180 名を中級レベルとして扱い、第二次データの学習者を、SPOT の成績によって初級と上級に分けた²。その結果、初級レベルが 49 名、上級レベルが 33 名となった³。母語話者データには、第二次データの 50 名を使用した。

次に、調査対象となるタスクについて述べる。I-JAS には発話・作文の複数のタスクが含まれている (迫田他 2016)。本研究では、日本語母語話者である調査実施者と調査協力者の約 30 分のインタビュータスク (以下、I タスクと呼ぶ)、日本料理店の店長役 (調査実施者) とアルバイト役 (調査協力者) のロールプレイトタスク (以下、RP タスクと呼ぶ)²種、4～5 コマのイラストのストーリーを述べるストーリーテリングタスク (以下、ST タスクと呼ぶ)²種を調査対象とする⁴。これ

¹ SPOT (Simple Performance-Oriented Test) は、TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) の 1 つで、言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである。J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は、日本語能力自動判定テストで、聴解、語彙、文法、読解の 4 セクションから日本語能力を測定するものである。 (迫田 2016: 98)。

² SPOT の成績区分は、以下のページで示されている基準を参考に、55 点以下を初級、81 点以上を上級とした。 <http://ttbj.jp/p2.html> (2017 年 8 月 1 日確認。現在は <http://ttbj-tasukuba.org/p2.html> に移行 (2018 年 3 月確認))。

³ I-JAS のデータ収集時に成績を照会できない学習者が 4 名いたため、その学習者は分析から除外した。また、中級レベルの学習者との人数のバランスに関しては、コーパスの公開データの制約と捉え、同一タスクを行った統制された学習者データを比較することを重視する。また、第一次データには、12 の言語を母語とする学習者が均等に含まれているが、第二次データで追加公開されたのは中国語・韓国語・英語・トルコ語を母語とする海外の学習者 (各 35 名) と国内の学習者 (50 名) である。そのため、中級レベルとみなしたデータ群には 12 言語の話者が均等に含まれるが、初級と上級には第二次データの学習者のみが含まれる。このように、母語による偏りがないわけではないが、これも公開データの制約と捉え、今後の課題とする。

⁴ 本研究では「対話」という語を「独話」の対語として用い、タスクの総称とするため、迫田他 (2016) で「対話」と呼ばれているインタビュータスクを本研究では「インタビュー」と呼ぶ。

らはすべて発話のタスクであり、発話を書き起こしたデータがコーパスに収録されている。

4.2 調査の手順

調査は短単位データ 20170519 版を用いて行った⁵。本研究の対象となるフィラーは、感動詞に含まれることから、調査対象のタスクから品詞が感動詞となる語をすべて抽出した。また、調査協力者の発話だけを分析対象とした。

I-JAS の書き起こしデータは UniDic に基づいて形態素解析されているが、感動詞の中でも特にフィラーに関しては注意が必要である。迫田 (2016: 177) には、「学習者の場つなぎ的表現にはこちらの推測を超えた多様なものがありえるため、タグ F で一律に品詞を指定することとした」と述べられている。そのため、時に「アッエット」「ンー、マ」のような複数のフィラーが連続して生じていると思われる場合でも、それらにまとめてタグ F が付与されることによって「アッエット」や「ンー、マ」それぞれに 1 語の感動詞という形態論情報が付与される。UniDic に一致する語がない場合は、語彙素が空白となる。

そこで、本研究では、感動詞として抽出された語の中に「,」が含まれるものは「,」で区切り、語の分割を行った。I-JAS において「,」は発話のポーズに付されるため、ポーズが挿入される個所は語の切れ目であるとみなした⁶。

このような手順で得られた延べ語数は表 1 の通りである。各タスクの総語数を産出する際には、分析に不要であると考えられる「空白」「記号」「補助記号」「あいづち」「非言語行動」「解析困難箇所」は除外している。また、上記のような手順で得られた感動詞には語彙素が空白の語が一定割合生じるため、感動詞総数の集計は語彙素ではなく書字形をベースに行った。そのため「中納言」で抽出される感動詞数とは異なっている。

表 1 分析対象語数

調査協力者種別	I タスク		RP タスク 2 種		ST タスク 2 種		総計	
	感動詞総数	総語数	感動詞総数	総語数	感動詞総数	総語数	感動詞総数	総語数
初級	17,492	96,750	3,025	14,686	1,662	11,736	22,179	123,172
中級	69,299	466,631	13,528	81,854	7,112	59,475	89,939	607,960
上級	9,709	109,955	1,904	16,600	629	9,507	12,242	136,062
母語話者	12,356	195,576	1,971	20,561	690	11,055	15,017	227,192

表 1 で得られた語を第一段階とし、次に第二段階の集計を行った。まず、各タスクの書字形上位 30 語を対象とし、目視で語彙素が共通であると思われるものを統一する作業を行った⁷。この

⁵ 論文投稿時 (2018 年 1 月) には、新たに短単位データ 20171124 版が公開されているが、分析はデータ取得時のものを用いている。

⁶ しかし、この手法では、「アッエット」のような語は「アッ」と「エット」に区切ることができない。このような語が一部、分析対象として残っていることは留意する必要がある。

⁷ 手順を具体的に述べると、UniDic による形態素解析を行った場合、書字形で「あー」や「あ」はともに語彙素「あ」にまとめあげられるが、本調査では各タスク上位 30 語に対して、目視でまとめあげ作業を行った。

段階では、フィラー以外の感動詞も含まれた状態である。上位 30 語を取ることで感動詞の全体を対象とすることはできなくなるが、どのタスクにおいても上位 30 語で感動詞全体の 90% 前後をカバーしていたため、分析の方向性に大きな影響がないものとする。5 節以降の分析は、第二段階の集計結果を用いて行う。

4.3 感動詞の分類

第二段階の集計で語をまとめあげる際は、田窪・金水 (1997)、山根 (2002)、須藤 (2008)、浅田 (2017) など、これまでの感動詞研究やフィラー研究において共通してまとめあげられている語群を参考にした。調査対象データに現れ、まとめあげた語群は、表 2 の通りである。なお、これらが第一段階で得られたすべての感動詞を表すわけではない。また、以下では語群のことを便宜的に語と呼ぶ。

表 2 語群とそこに含まれる書字形

型	語群	含まれる書字形
母音型	ア類	アー, ア
	アン類	アン, アーン
	エ類	エー, エ
	エン類	エン, エーン
	オ類	オ, オー
	ン類	ン, ンー, ウ, ウー
語彙型	エット類	エット, エットー, エート, エト, ト
	アノ類	アノ, アノー
	マア類	マ, マア
応答詞	ハイ類	ハイ, ハーイ
	イヤ類	イヤ, イヤー
	ウン類	ウン, ウーン

山根 (2002) の分類に従うと、母音「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」とそれらの母音が伸びた音は母音型のフィラーと呼ばれる。また、どの母音にも分類できないあいまいな母音はあいまい母音型と呼ばれる。I-JAS の学習者の発話にもあいまい母音は多数現れるが、書き起こしの際に日本語の文字に落とし込む必要があるため、そのような音は「アン」「エン」などと表記されることがある。また、山根 (2002) は「ン (-)」「ウーン」「ウーント」などをまとめて「ンー」型としているが、本研究では「ンー」や「ウー」が外国語の母音のフィラーである可能性を考え、これらすべてを母音型と捉える。母音型と対応をなすものは、「エット」「アノ」のような日本語の語彙としてのフィラーである。これらを語彙型と呼ぶこととする。「ハイ」「イヤ」などは応答詞と考え、フィラーとは異なるものとして扱う。応答詞の中でも「ウン」はフィラーとしての用法がないわけではないが、詳細な用法分類は行っていないため、本研究では応答詞と位置づける。

5. 調査結果と分析

5.1 習熟度による違い

研究課題 (1) に答えるため、習熟度別に、全タスクを対象に集計した感動詞の上位 10 語を表 3 に示す。感動詞全体におけるフィラーの位置づけを確認するため、以下ではフィラー以外の語も併せて上位 10 語を示す。フィラーには下線を付した。数値は 1 万語あたりの調整頻度である。また、調整頻度の後ろに感動詞総数に占める当該語の割合を示した。

表 3 習熟度別に見た感動詞上位 10 語 (1 万語あたりの調整頻度)

	初級		中級		上級	
1	<u>ア類</u>	380(21%)	<u>ア類</u>	312(21%)	ハイ	278(31%)
2	<u>エ類</u>	305(17%)	ハイ	279(19%)	<u>アノ類</u>	154(17%)
3	ハイ	289(16%)	<u>ン類</u>	155(10%)	<u>マア類</u>	100(11%)
4	<u>ン類</u>	192(11%)	<u>エ類</u>	153(10%)	<u>ア類</u>	98(11%)
5	ウン類	171(9%)	<u>アノ類</u>	143(6%)	<u>エツト類</u>	69(8%)
6	<u>アノ類</u>	128(7%)	ウン類	93(6%)	<u>ン類</u>	54(6%)
7	<u>エツト類</u>	83(5%)	<u>エツト類</u>	93(2%)	<u>エ類</u>	38(4%)
8	<u>アン類</u>	42(2%)	<u>マア類</u>	33(2%)	<u>ソノ類</u>	21(2%)
9	エエ	15(1%)	<u>アン類</u>	20(1%)	イヤ類	9(1%)
10	<u>マア類</u>	12(1%)	<u>ソノ類</u>	11(1%)	アリガトウ	8(1%)
計	1617(90%)		1292(87%)		829(87%)	

表 3 を見ると、どのレベルも上位 10 語のうち 7～8 語がフィラーであることがわかる。また、初級・中級・上級のどのレベルにおいても、ア類、ン類、エ類、アノ類、マア類、エツト類の 6 語のフィラー（表中に網掛けで表示）が現れていることがわかる。ア類、ン類、エ類は母音型フィラー、アノ類、マア類、エツト類は語彙型のフィラーである。そのため、以下の分析ではこの 6 語に焦点を当てて行うこととする。

次に、習熟度別に上位のフィラーを概観する。初級レベルのフィラーを見ると、ア類、エ類、ン類、アン類の母音型が上位を占める。この 4 語で感動詞全体の 51% を占めている。語彙型のエツト類、アノ類、マア類はそれほど多く見られない。中級レベルになると、フィラーは依然として母音型が目立つものの、全体の中で見ると 42% と、初級に比べるとやや減少する。語彙型のアノ類、エツト類、マア類が少しずつ増え、10% に上る。上級レベルはこれら語彙型の感動詞がさらに増え、36% を占めるようになる。母音型はア類、ン類、エ類が見られ、初級レベル・中級レベルで見られたアン類は上位 10 語にあがってこなくなる。

習熟度が変化するにつれて、母音型のア類、ン類、エ類と、語彙型のアノ類、マア類、エツト類の割合がどのように推移していくかを示したものが図 1 である。母音型フィラーを実線、語彙型フィラーを点線で表している。縦軸はそれぞれの語が感動詞全体に占める割合を表す。図 1 を見ると、習熟度が上がるにつれて母音型が徐々に減り、語彙型が徐々に増えていることがわかる。

語彙型の中でも、エット類がゆるやかに増えているのに対し、アノ類とマア類は上級レベルになって伸び率が上昇している。

このように、習熟度が上がるにつれてフィラーの使用に変化が見られる。

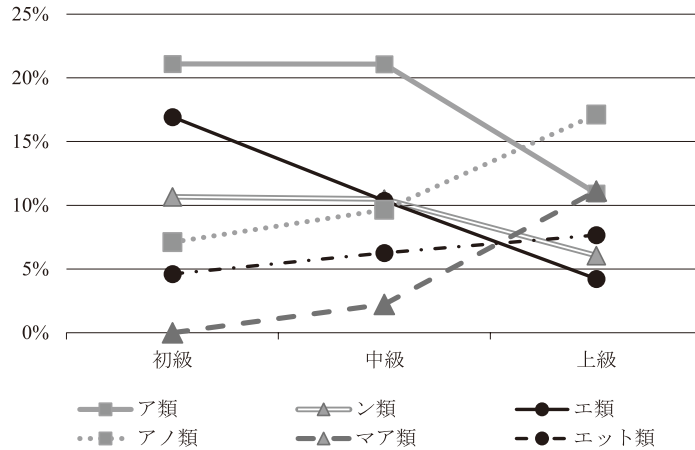


図1 習熟度別に見た母音型・語彙型フィラーの推移

次に、全タスクの総語数における母音型・語彙型フィラー6語の割合を習熟度別に示す(図2)。比較として母語話者も提示する。初級では総語数の約11%がフィラーであるが、その割合は徐々に減る。上級になると約5%で、母語話者の約4%に近づいていることがわかる。

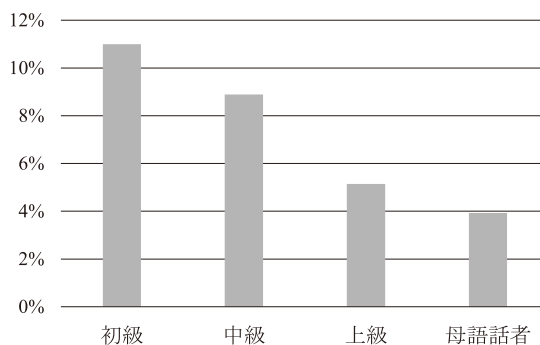


図2 総語数における母音型・語彙型フィラーの割合

次の(1)～(3)は、初級から上級までの学習者の発話例である。これらは一例であるが、初級におけるア類の多用、フィラーそのものの割合の多さなどが感じられる。また、(2)に現れるアン類は、表3からわかるように初級・中級で見られるが、上級ではほぼ見られず、上級になるとアノ類などの語彙型の割合が増える。

- (1) あ, 三時から五時半まで, は, アルバイト, がありました, それから, あ, 図書館で, あ, 勉強し, しました

(ID: EUS23 / 初級 / I タスク / 英語母語話者)

- (2) そして教師は, あーん, 学生達は興味をも あん 持って 〈うん〉 その んー ドラマーなどの あー, あ 紹介します

(ID: CCM23 / 中級 / I タスク / 中国語母語話者)

- (3) え, これ, 刺身ーって言えばいいかな, あの, フォーと言う 〈うん〉, 魚をフォー, うん魚が, 魚, 腐る? 〈んー〉, くさ, くささせる?

(ID: KKD07 / 上級 / I タスク / 韓国語母語話者)

5.2 タスクによる違い・母語話者との違い

5.2.1 タスクの概要

次に, 研究課題の (2) と (3) に答えるため, タスクによる違いと母語話者との違いを見る。まず, それぞれのタスクの概要を見る。

迫田他 (2016) によると, I タスクは, 調査協力者と調査実施者による 30 分程度の自然な流れの会話である。データ間での比較を考慮して内容はある程度固定されている。RP タスクは, 設定された場面に応じて与えられた役を演じて会話するタスクである。役割は日本料理店の店長 (調査実施者) とアルバイト (調査協力者) とされている。RP の 1 つ目のタスクは働く日数を減らすように店長に依頼するもの, 2 つ目のタスクは店長からの業務内容の変更依頼を断るものである。ST タスクは, 提示されたイラストのストーリーを話すタスクである。ST の 1 つ目は「ピクニック」というタイトルの 5 コマのイラスト (図 3), 2 つ目は「鍵」というタイトルの 4 コマのイラスト (図 4) で, それぞれストーリーの最初の 1 文は固定されている。「ピクニック」の場合は「朝, ケンとマリはサンドイッチを作りました」, 「鍵」の場合は「ケンは, うちの鍵を持っていませんでした」であり, 調査協力者はこの文の続きを話していく。

このようなタスクの性質上, I タスクと RP タスクは対話, ST タスクは独話と考えることができる。

びく にっく
ピクニック (picnic)

かぎ
鍵 (Key)

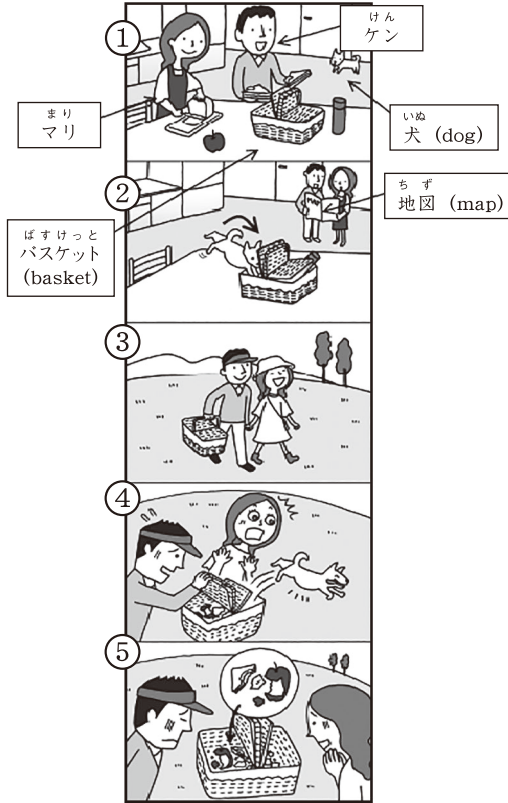


図3 「ピクニック」のイラスト

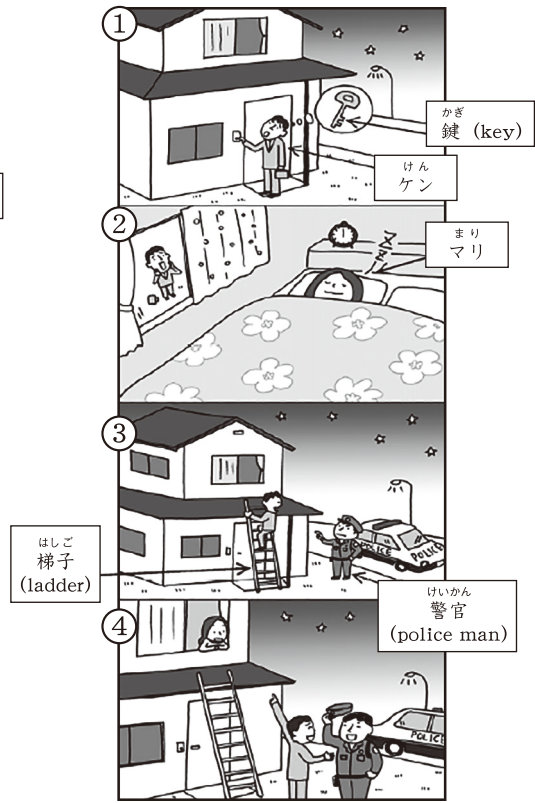


図4 「鍵」のイラスト

5.2.2 母語話者のフィラーの使用

タスク形態の違いが発話内容にもたらす影響を考えるために、まず母語話者のフィラーをタスク別に分析する。学習者と同様に、母音型のア類、ン類、エ類、語彙型のアノ類、マア類、エツト類の計6語を対象とする。結果を図5に示す。縦軸は、1万語あたりの調整頻度である。

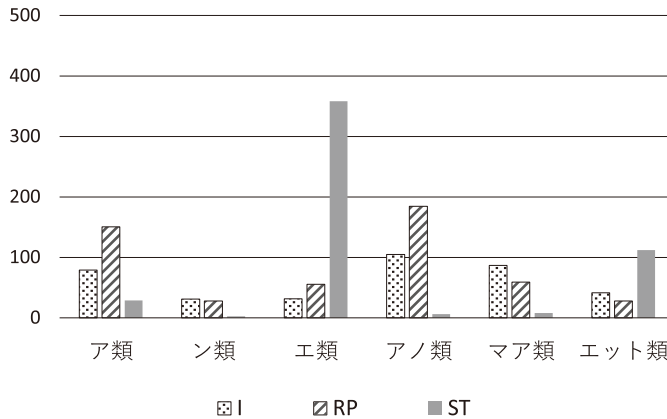


図5 母語話者データにおける各タスクのフィラー

まず目を引くことは、対話のIタスク、RPタスクと、独話のSTタスクにおけるフィラーと対比的な現れ方を示す点である。IタスクとRPタスクで見られるアノ類、マア類、ア類は、STタスクでは少なく、逆にSTタスクではエ類とエツト類が多い。

「アノ(一)」と「エツト」を心的モニターの標識と捉えて分析した定延・田窪(1995)によると、「アノ(一)」は、話し手が、名前の検索や適切な表現の検索という言語編集を行っていることを表すものであるとされ、聞き手の存在を予定した心的操作である。また、言語形式に気を配っているという態度を表す「アノ(一)」は、結果として発話のぞんざいさ・さしでがましさを減殺できるとされている。また、このような性質から、「アノ(一)」は聞き手の存在を必ず予定しており、独り言では使えないと言われている(田窪・金水1997)。一方、「エツト」は談話中に必要となる検索や演算のための予備的な心的操作が必要になっていることを表し、結果として、聞き手が存在する場合には話し手が心的操作のために聞き手とのインターフェイスを一時遮断する宣言として働くとされる(定延・田窪1995)。そのため、発話のぞんざいさ・さしでがましさを減殺したりする効果はなく、また、聞き手のいない場面でも使用できる。これらの分析は、母語話者のアノ類とエツト類の使用傾向と合致している。また、STタスクで多用されるエ類は、浅田(2017)では、思考やためらいなどの暗示を伴うもので、話者の発話への意識の高さを表すため無意識のときには用いないとされている。調査実施者のいる前でストーリーを語るというSTタスクの性質を強く反映しているといえるだろう。

タスク形態とフィラーの関連を明らかにするため、図5のデータを基にタスクをケース、フィラーを変数としてクラスター分析を行った。距離の計算にはユークリッド距離を用い、Ward法でクラスターリングした。コーフェン相関係数は0.9968である。

図6の横軸はタスク種別を示している。クラスター分析の結果からも、IタスクとRPタスクが対話というクラスターをなし、独話のSTタスクとは異なることがわかる。

図7には、タスクだけでなく、変数であるフィラーの樹形図を同時に表すことができるヒート

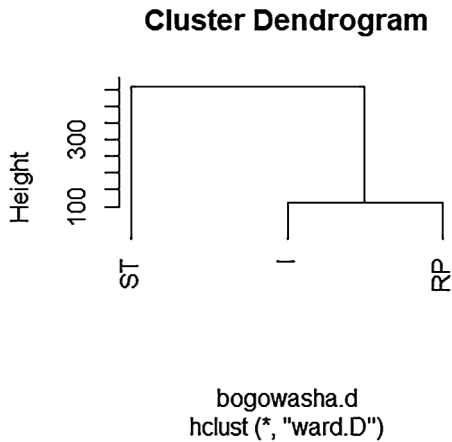


図6 母語話者データのクラスター分析

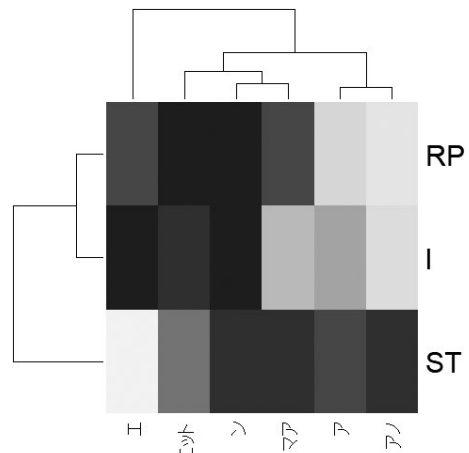


図7 ヒートマップ

マップを示す。縦軸はタスク種別、横軸はフィラーの各語を示している。上掲のヒートマップは、最遠隣法でクラスター分析した結果を示したものであり、色の濃い部分が相対的に値が小さく、色の薄い部分が相対的に値が大きいことを表している（金 2017: 116）。つまり、独話の ST タスクはエ類と最も対応関係が強く、次いでエット類と関係が強い。I タスクはアノ類とマア類、RP タスクではアノ類とア類との対応関係が強いことがわかる。また、I タスクと RP タスクを対話タスクとしてまとめると、マア類、アノ類、ア類との対応関係が強いといえる。

これらの結果から、母語話者はタスクの性質に応じてフィラーを使い分けているといえる。次の (4) ~ (5) は、独話の ST タスクと対話の RP タスクにおいて、それぞれに特有のフィラーが用いられている発話例である。(5) の「C」は調査実施者、「K」は調査協力者を表す。

- (4) えっとケ、えーケンとマリが地図を見ていると、んバスケットの中に、い犬がは入ってしまいました。ケンとマリはえー気づかずにバスケットを持ってピクニックに出かけました。えー公園に着くと公園に公園に着いてえーバスケットを開けようとしたところ中から犬が出てき、きました

(ID : JJJ12 / ST タスク / 日本語母語話者)

- (5) C : うんうんどうしたの？うん

K : あの私、〈はい〉今週に三日入れ入れてるんですけど〈えええ〉それをちょっと学校忙しくなってしまったので〈うん〉二日に変更できないかなって思っ

(ID : JJJ15 / RP タスク / 日本語母語話者)

5.2.3 学習者のフィラーの使用とタスクの違い

次に各タスクにおける学習者のフィラーを習熟度別に示す。分析対象のフィラーは、5.2.2 と同様に母音型のア類、ン類、エ類、語彙型のアノ類、マア類、エット類の計 6 語とする。図 8 に初級学習者のフィラー、図 9 に中級学習者のフィラー、図 10 に上級学習者のフィラーを示す。

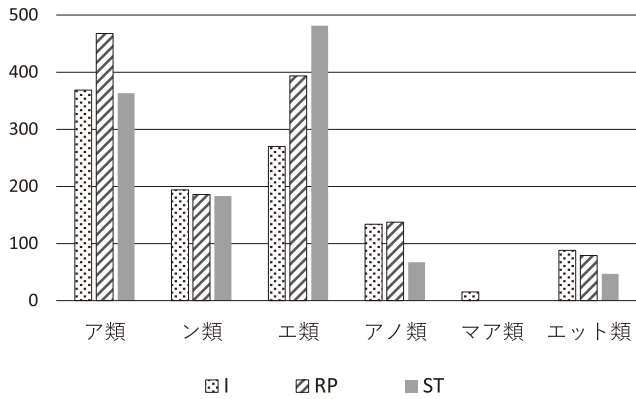


図8 初級学習者データにおける各タスクのフィラー

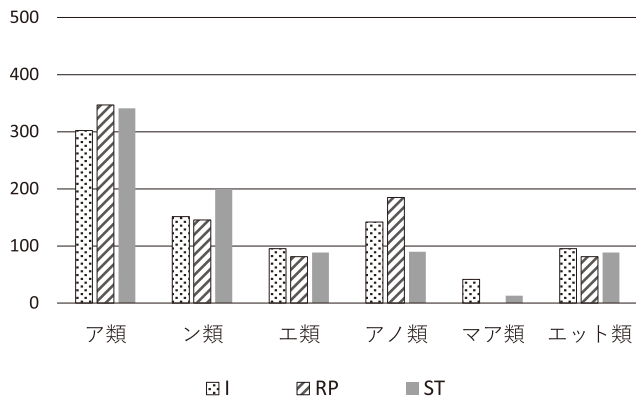


図9 中級学習者データにおける各タスクのフィラー

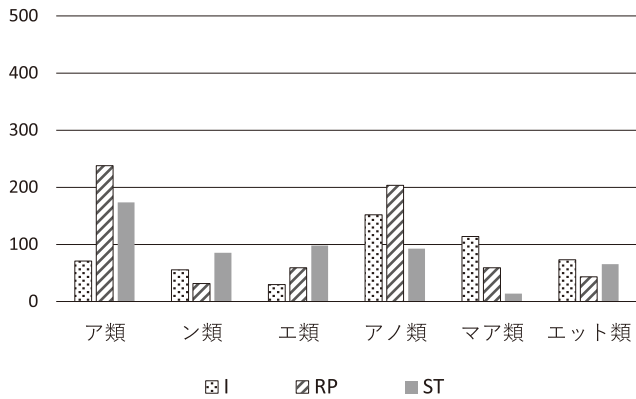


図10 上級学習者データにおける各タスクのフィラー

図 8, 図 9 を見ると, 初級ではア類が対話の RP タスクで多く, エ類が独話の ST タスクで多いなど, 対話と独話にわずかな差はあるものの, 母語話者のフィラーに見られたような「対話ではアノ類, マア類, ア類が多く, 独話ではエ類, エット類が多い」というタスク形態に応じた違いが見られないことがわかる。一方, 図 10 の上級学習者のフィラーを見ると, 3 つのタスクそれぞれで異なる傾向がある。しかし, その様子は図 5 の母語話者のフィラーとは異なっており, 母語話者が, 対話と独話でフィラーを使い分けていたのとは異なる傾向が見られる⁸。上級では, 初級・中級レベルではわずかの使用しかないアノ類やマア類の語彙型フィラーが増加するが, 聞き手が存在する場合に使用されるアノ類(田窪・金水 1997)を, 独話タイプの ST タスクで多用しており, アノ類の意味を理解して使用するには至っていないと考えられる。

ここから次の 2 点が示唆される。1 点目は, 初級・中級レベルにおいては, 対話や独話といったタスクの異なりを意識したり, それぞれのフィラーがもつ意味や働きを意識して, タスクごとにフィラーを使い分けることは困難である, という点である。小西 (2017) では, I-JAS における中級学習者の産出語彙をタスク別に分析し, 学習者が対話と独話というタスクの形態によって機能語を使い分けるに至っていないことを示している。本研究も同様の結果といえよう。2 点目は, 上級レベルで, タスクに合わせたフィラーの使い分けへの意識が始まるのではないかと, という点である。上級は, 独話・対話といったタスクの形態や, 対話の相手といった, 談話の内容以外の多様な要素に目を向けることができるようになってくるが, まだ正確な運用への過程にあると考えられる。上級学習者がもつこのような特性に対する指摘は, 山内 (2009) や南 (2005) などでも行われているが, フィラーに関しても同様の結果が得られたといえよう。

6. まとめと今後の課題

本研究では, 学習者のフィラーの使用を習熟度別, タスク別に分析した。その結果, 各研究課題に対して以下のような結果を得た。

- (1) 学習者のフィラーの使用を習熟度別に見ると, 習熟度が上がるにつれて母音型の割合が減り, 語彙型の割合が増える。母音型は, 初級・中級レベルではア類, エ類, ン類, アン類が用いられるが, 上級になるとアン類が用いられなくなる。
- (2) 学習者のフィラーの使用をタスク別に見ると, 初級・中級レベルではタスクの違いに応じてフィラーを使い分けることはできていない。上級レベルになると, タスクごとにフィラーの使用傾向に違いが現れるが, 正確な運用には至っていない。
- (3) 学習者と母語話者におけるフィラーの使用の違いを見ると, 母語話者は対話タスクと独話タスクでフィラーを使い分けている。母語話者は対話タスクではアノ類を多用し, 独話タスクではエット類とエ類が多い。

⁸ しかし, I タスクにおけるフィラーの使用傾向は, 母語話者と似通っている。この点は, 今後一層の分析が必要である。

本研究では、フィラーを分類し、学習者のフィラーの使用の全体像を把握しようと努めた。そのため、それぞれのフィラーが実際の発話の中でどのように使用されているかについては分析の対象外とした。学習者のフィラー使用の実態をより詳細に把握するためには、上級レベルでアノ類とエツト類がどのように使われているかなど、個々の発話の分析が必要である。また、音調に関しても本研究の分析の対象外とした。これらは今後の課題としたい。

参考文献

- 浅田秀子 (2017) 『現代感動詞用法辞典』 東京：東京堂出版。
- Iwasaki, Noriko (2011) Filling social space with fillers: Gains in social dimension after studying abroad in Japan. *Japanese Language and Literature* 45: 169-193.
- 金明哲 (2017) 『R によるデータサイエンス 第2版』 東京：森北出版。
- 小西円 (2017) 「日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違：I-JAS の異なるタスクを用いた比較」『国立国語研究所論集』 13: 79-106.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 東京：くろしお出版。
- 南雅彦 (2005) 「日本語学習者のナラティブ ラボヴィアン・アプローチ」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育 IV』 137-150. 東京：くろしお出版。
- 宮永愛子 (2009) 「会話におけるフィラー「あの」の使用文脈—日本語母語話者と日本語学習者を比較して—」『広島大学日本語教育研究』 19: 39-46.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2010) 『現代日本語文法 1』 東京：くろしお出版。
- 西山友恵・斉木ゆかり・呉素蓮・土屋守正 (2007) 「流暢さとフィラーについての一考察」『東海大学紀要 留学生教育センター』 27: 43-54.
- 野田尚史 (2015) 「日本語非母語話者の感動詞の不自然な運用」友定賢治 (編) 『感動詞の言語学』 149-165. 東京：ひつじ書房。
- 定延利之 (2005) 「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」『月刊言語』 34(11): 33-39.
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」—」『言語研究』 108: 74-93.
- 迫田久美子 (2016) 『海外連携による日本語学習者コーパスの構築—研究と構築の有機的なつながりに基づいて—I-JAS 構築に関する最終報告書』(平成 24-27 年度科学研究費助成事業 (基盤研究 A) 課題番号：24251010 研究代表者：迫田久美子)。
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』 6(3): 93-110.
- 須藤潤 (2008) 「日本語感動詞の音調記述の試み—1 音節感動詞を中心に—」『音声言語』 IV: 29-52.
- 高村めぐみ (2012) 「日本語学習者のインタビューでの発話におけるポーズとフィラーの関係」『比較文化研究』 102: 101-111.
- 田窪行則 (1995) 「音声言語の言語学的モデルをめざして—音声対話管理標識を中心に—」『情報処理』 36(11): 1020-1026.
- 田窪行則 (2005) 「感動詞の言語学的位置づけ」『月刊言語』 34(11): 14-21.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会 (編) 『文法と音声』 257-279. 東京：くろしお出版。
- 堤良一 (2008) 「談話中に現れる間投詞アノ(ー)・ソノ(ー)の使い分けについて」『日本語科学』 23: 17-36.
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』 東京：くろしお出版。
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』 東京：ひつじ書房。

関連 Web サイト (2018 年 3 月確認)

多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS) (国立国語研究所) <http://lsaj.ninjal.ac.jp/>

Analysis of Fillers Used by Japanese Language Learners According to Their Level of Proficiency

KONISHI Madoka

Tokyo Gakugei University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

This study analyzed the use of fillers by learners of Japanese using the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS) in the following three aspects: (1) different usage across different learner proficiency levels, (2) different usage depending on the type of task, and (3) how filler usage differs between learners and native speakers. The results showed that beginner-level learners mostly used vowel-type fillers; usage of such fillers decreased as fluency increased, overtaken by vocabulary-type fillers. Furthermore, the study found that native speakers used different fillers in dialogue tasks than in individual monologue-style tasks, while beginner and intermediate learners showed no such tendencies, as such learners have limited knowledge of interjections and are unskilled in choosing different ones according to the type of task. While learners with a higher proficiency began to display differences in their use of fillers according to different tasks, they did not always accurately use these fillers.

Key words: fillers, proficiency level, type of task, Japanese language learners, I-JAS